

## 輸出の増勢が強まり貿易収支は緩やかに改善（10月貿易統計）

10月の貿易赤字は、輸入を上回る輸出の増加によって縮小した。輸出は、中国以外のアジア向けを中心に数量ベースでも増勢が強まった。円安や東南アジア景気の持ち直しが追い風となっている模様である。一方の輸入も増加が続いているが、国内景気の低迷などから勢いが弱まっている。今後も、米国やASEANを中心とした海外需要の回復を背景に輸出の持ち直しが続き、貿易赤字も緩やかに縮小していく展開が予想される。

### 貿易収支は緩やかに改善

10月の貿易収支（速報値）は、輸入が前年同月比+2.7%の7兆3,985億円となった一方で、輸出が前年同月比+9.6%の6兆6,885億円となり輸入を上回って増加したため、赤字幅が前年同月の1兆1,004億円から7,100億円へ3,904億円縮小した。

季節調整値で見ても、10月の輸出は前月比+1.9%（5ヵ月連続のプラス）と輸入の+0.4%を上回って増加したため、貿易赤字は9月の1兆677億円から10月には9,775億円へと縮小した。

貿易収支は、国内景気の低迷などにより輸入が伸び悩む一方、輸出が徐々に持ち直してきたことから、緩やかなペースではあるが改善する方向にある。

輸出入と貿易収支の推移（月次、季節調整値、兆円）



(出所) 財務省

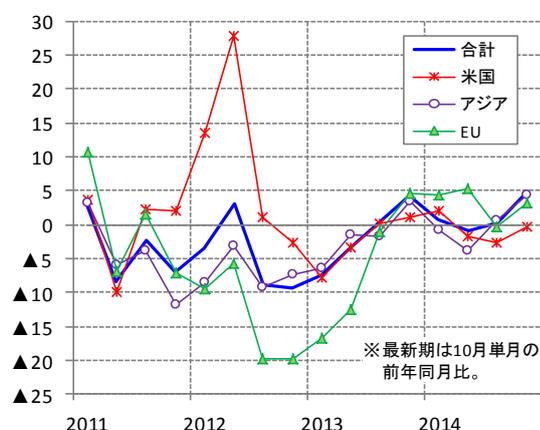
### 輸出：円安進行や東南アジアの景気回復が追い風に

輸出が前年同月比で1割近い伸びとなったが、これを価格要因と数量要因とに分けて見ると、価格が+4.6%と円安進行により伸びを強めたほか、数量も+4.7%と9月の+2.8%を上回る伸びとなった。

数量要因について、仕向地別の数量指数を見ると、米国向け（2013年度シェア19%）が前年同月比▲0.4%と7ヵ月連続のマイナスになったが、7ヵ月の中では最小のマイナス幅となった。自動車などの海外生産シフトの影響が残っているものの、堅調な米国景気とともに、円安進行による日本製品の価格競争力改善が落ち込みを緩和している可能性がある。また、EU向け（シェア10%）は、欧州景気の停滞を映じた減速傾向にあると考えられるが、10月については+3.2%と、9月（▲4.9%）の大幅な落ち込みのリバウンドが出てプラスとなった。

一方、アジア向け（シェア54%）は、9月の+4.9%から10月には+4.4%へと伸びが鈍化した。アジア向けの3分の1を占め

仕向地別輸出数量の推移（前年同期比、%）



(出所) 財務省

る中国向け（9月+3.7%→10月▲1.6%）がマイナスに転じたことが大きく響いた。しかし、裏返せば、NIEs や ASEAN への輸出は堅調に拡大し、輸出全体を牽引したと考えられる<sup>1</sup>。さらに、米国・EU・アジア向けの伸びがいずれも全体平均を下回ったことから、（11月27日公表の確報を待って確認する必要はあるが）中南米向け（シェア5%）<sup>2</sup>などの増勢が強まったものと推察される。

なお、10月のNIEs、ASEAN向け輸出を金額ベースで確認すると、双方にシンガポール（前年同月比+30.0%）が含まれていることに留意の必要はあるが、それぞれ前年同月比+14.1%、+10.8%と2ケタ増になった。これを財別に見ると、両地域向けで、化学製品や鉄鋼、半導体等電子部品といった生産財が堅調に拡大したほか、船舶が大幅増となって輸出全体を押し上げた。円安に伴う競争力回復に加え、東南アジアの景気持ち直しが、日本の輸出の追い風となり始めた可能性が窺える。

### 輸入：鉱物性燃料を中心に増勢弱まる

輸入は、上記の通り前月比では0.4%増となったが、前年同月比では9月の+6.2%から10月には+2.7%へと伸びが鈍化した。品目別には、原油やLNGをはじめとした鉱物性燃料（2013年度シェア34%、9月前年同月比+3.2%→10月▲5.9%）がマイナスに転じたことが大きく影響した。

輸入の変化を価格要因と数量要因とに分けると、価格が9月の+3.2%から10月には+4.9%へと伸びを高めた一方、数量が+2.9%から▲2.1%へとマイナスに転じた。原油などの国際商品市況が悪化している中での輸入価格の騰勢加速は、円安の影響が強く影響していると考えられる。一方、数量については、原油・粗油（9月▲3.7%→10月▲8.8%）のマイナス幅が拡大し、LNG（+10.5%→▲7.9%）と一般炭（+3.9%→▲4.6%）がマイナスに転じるなど、鉱物性燃料の落ち込みが目立つ。そのほかでは、電算機類（▲11.2%→▲16.7%）の落ち込みが加速、「WindowsXP」のサポート終了（今年4月）に伴うパソコンの駆け込み需要の反動が続いた。

以上の通り、10月の貿易統計からは、輸出持ち直しの動きと、輸入の増勢が弱まっていることが確認された。今後も基本的には、海外需要の回復（米国堅調、ASEAN復調）を受けた輸出の持ち直しペースが輸入の増勢を上回ることにより、貿易赤字の緩やかな縮小傾向が続くと見込まれる。

そして、円安が1ドル=110円台後半まで進んでいることは、日本製品の価格競争力を高めるほか、今後の海外生産シフトのスピードを抑制し、特に一部品目の高級品分野などで生産拠点を国内回帰を誘発する可能性がある。勿論、円安が輸入を価格面から押し上げることにも留意の必要はあるが、ネットで見て貿易収支の改善ペースを加速させる要因となるかどうか、注視していく必要がある。

<sup>1</sup> 今回の速報では、対NIEsや対ASEANの輸出数量は未公表。

<sup>2</sup> 今回の速報により確認できる金額ベースで見ると、10月の中南米向け輸出は前年同月比+12.0%と、9月の+7.1%から伸びを高めた。